

安国論奥書

文永六年一二月八日 四八歳

文応元年^{太歳申}之を勘ふ。正嘉に之を始めてより文応元年に勘へ畢んぬ。

去ぬる正嘉元年^{太歳子巳}八月二十三日^{いぬい ごとく}戌亥の剋の大地震を見て之を勘ふ。

其の後文応元年^{太歳庚申}七月十六日を以て、^{やど や}宿谷禅門に付して故最明寺入道殿に奉れり。

其の後文永元年^{太歳甲子}七月五日大明星の時、^{いよいよ}弥々此の災の根源を知る。文応元年^{太歳庚申}より文

永五年^{太歳のちの 戊辰}後正月十八日に至るまで九箇年を経て、西方大蒙古国より我が朝を襲ふべき

の由^{ちようじよう}牒状之を渡す。又同六年重ねて牒状之を渡す。既に勘文之に叶ふ。之に準じて之

を思ふに未来も亦然るべきか。此の書は^{しるし}徴有る文なり。是^{ひとえ}偏に日蓮の力に非ず、法華

経の真文の感応の致す所か。

文永六年^{太歳己巳}十二月八日之を写す